公民館の講座から

国際理解「ブラジル・ポルトガル講座」を終えて

(1) ブラジル国についてのイメージ

ブラジルと聞いて何を連想しますか？たいがいの人はサッカー・バレーボール・カーニバル・サンバ・コーヒーなどを思い浮かべるのではないでしょうか。

ブラジルの面積は日本の23倍、人口は1億8000万人（世界第5位）である。人種的には先住民、ポルトガル系・イタリア系のヨーロッパ系白人、その混血、中央アフリカを中心としたアフリカ系黒人から構成されている。（日系人は人口の約1％）

現在、日本で外国人登録をしているブラジル国籍の入国者数は、平成17年末で30万2080人。全外国人登録者数の15％を占めている。現在、福生市においても平成18年末で123人78家族が住民登録をしている。

日本とブラジルとの交流は、1908年、笠戸丸で198人が最初にブラジルに渡ったときから始まり、明年は日本人のブラジル移民が始まってから100年を迎える。

(2) ブラジル移民の歴史について

近代日本の海外移住は、明治の開幕と共にハワイへの出稼ぎ移民によって始まる。そしてブラジル移民は25万人に及んだ。現在は混血が進み、日系ブラジル人数では、推定約200万人に達するといわれる。

通常ブラジルでは、人種差別のない国として知られているが、当初は移民として歓迎されたわけではない。ブラジルでは、外国移民は単なる労働力としてではなく、国民形成の要素として導入されヨーロッパ移民にその役割が期待されたためであった（ブランケアメントのイデオロギー※）。第二次世界大戦以前、二度にわたって排斥の対象となった（ヨーロッパ移民の増大が影響）が、ブラジルの日本人は「排日」を超えて、ブラジル市民として活躍する基盤を作り出したのである。

(3) 日系人におけるブラジル化

ブラジルの公用語はポルトガル語である。今日、日系世帯の46％は日系人と非日系人の夫婦で、混血化が急速に進行している。日系世帯の半分以上がポルトガル語を話し、日本語だけで会話をする世帯は6％、ポルトガル語と日本語を混ぜて会話している世帯を合わせても、日本語を使用している日系世帯は26％にすぎない。このように日本人の「ブラジル化」は急速に進展してきた。

(4) 今後の課題について

ブラジルから日系人が来日し始めて以来、彼らの日本での労働条件、生活の様子や子どもの教育問題などがマスコミ等で多々取り上げられてきた。しかしそのほとんどが日本における「短期滞在者」としての問題として捉えたものであり、日系ブラジル人たちは、いずれは日本から出て行くものであると見られてきた。しかし、日系ブラジル人は様々な側面からみて日本に定着しつつあり、彼・彼女らがブラジルへ帰国する可能性は徐々に少なくなってきている。

今後の課題としては、日本に永住する日系人の実態把握であろう。つまり、日系人が日本国籍を持たないまま日本で生活をする場合の就職や結婚の問題、そして社会保険に加入していない日系人、の老後の生活維持などの問題に取り組んでいかねばならない。

今回の講座でブラジル移民の事、ブラジルの文化風習を学ぶことができた。また福生からもブラジルへ移民に出かけた人もいる事がわかった。来年ブラジル移民100年を迎えるに当り、このような国際理解の講座を予定している。

次回の企画は、日本の国策としてなぜ移民政策がとられたか。なぜ西日本の方が多く移民を希望したのか。現地での生活はどうだったのか。日系ブラジル人の日本での教育問題などを中心に、さらに深めて学習していきたい。

※「脱アフリカ化」「白人優生主義」